

# 建設防災常任委員会行政視察報告書

栗 原 収

## 1 石川県金沢市

風格ある美しい都市景観に関する諸施策等について

### 【所見】

金沢市は、前田利家による加賀百万石の城下町として繁栄し、廃藩後も県庁所在地として政治、文化、経済の中心として発展を続け、10数次にわたる町村合併により平成8年に中核市となっている。

一方、加賀藩の時代から一度も戦争の被害にあっておらず、兼六園、犀川・浅野川、寺社、歴史的町並み等歴史や文化、自然が守られており、伝統的景観等を保存するために必要な条例の制定のほか新しい建築物とそれらを美しく調和させるために必要な様々な条例も制定されている。

特に指定した地域ごとにそれぞれの目的により都市景観を保護保存することは、特徴的な戦略であるといえるのではないか。たとえば、長屋町武家屋敷、ひがし茶屋街、寺町寺院群などを伝統環境保存区域として、金沢駅周辺等を近代的都市景観創出区域として、武士や商人が住んでいた町屋系を「こまちなみ」として、用水や斜面緑地等についても、それぞれの保護保存に沿った条例により規制している。

さらに、幹線道路沿道における周囲と調和しない屋外広告物や店舗等の沿道景観や昼間のみならず夜間における良好な景観を保つため規制をするなど「歴史のまち金沢」のまちづくりに取り組む姿勢は先進的なものであるといえる。

これらの施策については、足利市として学ぶべきものが多く、すぐにでも取り入れたいものもあるが、市民性の違いやすでに形成されている都市景観との整合等様々な問題点をクリアしなければならないものと思われる。

本市都市景観のあり方については、市民による十分な協議を踏まえ「歴史のまち足利」を後世に残していくべきであると強く感じた。

なお、金沢市においても世界遺産暫定リスト入り目指し「城下町金沢の文化遺産群と文化的景観」と位置づけ提案している。

## 2 石川県輪島市

大規模災害発生に関する対応等について

### 【所見】

輪島市は、江戸時代に北前船の寄港地として栄え、伝統産業「輪島塗」に象徴される観光都市であり、平成18年に門前町と合併し新「輪島市」となったが、人口減少と過疎化が進行するほか高齢化率は38.2%である。

このような状況下の輪島市において、平成19年3月25日午前9時41分能登半島沖の日本海にマグニチュード6.9（震度6強）の「平成19年能登半島地震」が発生し、死者1人、負傷者115人（ともに輪島市のみ）、家屋倒壊・道路崩落や電気・ガス・上下水道のライフラインの寸断が発生した。

地震発生後、直ちに市においては災害対策本部を設置（3月25日午前10時10分）するとともに自衛隊に対し災害派遣要請（3月25日午前10時50分）した。他方、国及び県においては、現地連絡対策室を市役所内に設置（3月25日）し、被害状況や市からの要望の把握が行われたほか、自衛隊の災害派遣による給水・給食支援（3月26日）が実施された。また、輪島市社会福祉協議会においては、ボランティアセンターを設置（3月27日）したが合併前の輪島と門前に機能が分散し結果的に2箇所の設置となった。

輪島市は、合併後大規模な災害訓練を実施しておりその直後の被災であったことから初期対応等がスムーズであったほか、高齢化率が高いことから民生委員によるお年寄りの住居が把握されており、要援護者マップがあったことから被災後の対応もスムーズであったとのことである。

問題点としては、テレビ等のマスコミ対応やボランティアの受け入れ、支援物資の受け入れ等があり、初期段階ではこれらに対応するための人員が確保できないばかりか、本来業務（被害把握、応急対応等）に支障をきたしたとのことであった。

支援物資及びボランティアの受け入れに関する情報については、早い段階で必要の有無を全国に向け発信する必要があるそうであるが、その後発生した新潟県中越沖地震の際には支援物資の受け入れを必要としていない旨がホームページに掲載されていた。

本市においては、地震による災害が幸い少ないが、自然災害（台風による水害）は発生しており、今後発生しない保証はなく、あらゆる災害に対応できる危機管理体制整備の確立とその効果的運用のための訓練の必要性を強く感じた。

なお、私自身、新潟県中越地震においては発生直後に3日間のボランティアを1年後に2日間の復興状況視察を、新潟県中越沖地震においては延べ5日間のボランティアの経験を積んでおり、今回の視察で得た知識とあわせ、今後の本市の体制整備のために生かしていきたい。



